

「国際ボランティア論」における教育実践と学生の変容

長濱 和代・江川 あゆみ・石田 好広

(人間学部児童教育学科)

Educational Practice and Empowerment of Student at “International Volunteer Studies”

Kazuyo NAGAHAMA, Ayumi EGAWA, Yoshihiro ISHIDA

(Department of Childhood Education and Welfare, Faculty of Human Sciences)

ボランティアにおいては自発性が重要であるとされ、何かきっかけがあれば、学生は潜在する自発性を駆使してボランティア活動に興味関心をもつ。「国際ボランティア論」の授業では、NGO や NPO について知り、課題図書を通じて社会の現状と課題を習得した後、実際の現場で活動する組織の方をゲスト講師として迎え、話を伺う機会を設定した。学生は NPO や NGO でボランティアをするための企画書を個別に作成し、各自の発表によりボランティア活動を共有することを通じて、国際協力や社会貢献について考えた。授業では、身近にできるボランティアがあることや、貧困などの問題は途上国だけでなく、私たちの身近な問題でもあることに気づいた。学生は国際協力学の基礎とともに、目的に沿った知識と情報の収集力を身に付け、想像を駆使した「他者への共感」が向上したといえる。

キーワード：ボランティア、非政府組織（NGO）、非営利組織（NPO）、国際協力、社会貢献

はじめに

2020年に東京オリンピックを控え、市民や大学生がボランティアとして参加する意識が高まりつつあるが、他方では有償ではないことなどが課題として挙げられている。ボランティア活動において、参加者の無償性が着目されているが、他の価値について話題にされないのはなぜであろうか。

そもそも「ボランティア」とは、広辞苑によれば、①志願者、有志者、自発的に物事を行う人②志願兵③（法律用語で）無償労務提供者とする意味を表す。またボランティアの条件としては、「自発性」「無償性」「公共性」が挙げられる（内海 2011）。

また授業で開講している「国際ボランティア論」では、市民による「国際ボランティア」の定義として、個人の自発性と決断のもと、自身をふくめ特定の人間の私益のためではなく、紛争解決や平和の実

現、人権・ジェンダー（社会的性差）の問題、自然環境保全、開発（貧困削減）の課題など、国境を越える地球規模の公共的な課題に取り組むこと、また取り組む人々（熊岡 2004）と定義される。

ボランティアは決して援助だけではない。協力と共生が存在する。またボランティアは決して無償ではない。海外青年協力隊のような有償ボランティアも存在する。

ボランティアを「する人」と「される人」との関係は、先進国と開発途上国との関係だけではない。途上国から先進国への協力は、2011年に起きた東日本大震災の時には、東南アジア諸国をはじめ世界中の途上国と言われる国の人たちから支援を受けた。ボランティアにはこうした「意外」が存在する（牧田 2013）。

以上の内容は、「国際ボランティア論」での授業1・2回目の導入部分である。本授業は、ボランティア

表1 国際ボランティアに関心を持った動機（授業前）

学生からの回答	人数 (外国語学部)	人数 (児童教育学科)	合計	割合 (N=72)
1. いろいろな国、文化の人と出会いたい	3	6	9	13%
2. 国際社会に貢献したい	0	0	0	0%
3. 自分の成長のため	10	9	19	26%
4. 自己発見のため、自分を試したい	5	0	5	7%
5. 自分の世界を広げたい	9	13	22	31%
6. 違う文化に接してみたい	8	4	12	17%
7. 楽しそうだから	3	2	5	7%
9. その他（具体的に）	0	0	0	0%
合計	38	34	72	100%

や国際交流に関心のある学生が受講しているが、ボランティア体験を持つ受講生は決して多くない。

本稿では、学生らの授業でのコメントや振り返りから、学生の変容をとらえ、国際ボランティアに関する授業の意義を考察する。

1. 研究目的と方法

(1) 研究の目的と方法

本研究では、①履修学生の授業受講動機と背景、②履修学生が授業を通じてどのようなことに気づき考え変容したか、③授業の意義と課題の整理をすることを目的とした。

方法として、①初回の意識調査（挙手による）、②毎授業終了後に活用した学生による自己評価と授業評価（コメントシート）、③授業の中盤に実施したボランティア意識調査（人間学部児童教育学科の学生による質問紙調査）、および④最終回の授業後に実施した授業の振り返りと感想（無記名の質問紙調査）を活用した。

(2) 倫理的配慮

調査方法の②においては、最終授業の際に、研究に活用してよいかどうか、および同意の有無は成績と無関係である旨を確認し、同意を得られた学生の解答を使用した。③においては、事前にデータについては研究以外に利用しないことを説明してから、同意を得られた学生について実施した。また④にお

いては無記名として、実施後に提出することによって研究使用への同意を得られたこととする旨を伝え、回収した。

2. 使用する用語の定義

「ボランティア」の定義は、先に述べた「自発性」「非営利性」「公益性」であり、「国際ボランティア」の定義を「国境を越える地球規模の公共的課題に取り組むこと。また取り組む人々」とした。つまり、これらの要素があれば、有償無償に関わらず「国際ボランティア」に相当するものとする（新村2012）。

またNGO（Non-Governmental Organization）は国際協力を行う「非政府組織」、NPO（Non-Profitable Organization）は「非営利組織」、「NPO法人」は非営利活動促進法に基づく法人を指す。「認定NPO法人」はNPO法人のうち、「一定の基準を満たしている」と所轄庁（都道府県・政令市）が認めた法人であり、より客観的な基準において高い公益性をもっている法人であるといえる。

日本における国際ボランティア民間団体には、その他に特定の目的のために組織された「社団法人」と、個人や企業の財産を運用・活用するための団体として「財団法人」がある。前者は社員と社員総会が必要とされ、後者には設立のために300万円以上の資産が必要である。また内閣部や都道府県に「公益性」を認められると、「公益社団法人」「公益財団法人」となる。いずれも学生がボランティア活動を

表2 各回の授業テーマと印象に残った授業

回	授業テーマ	授業形式								
		人数 (N=57)	割合 (N=57)	講義	グループ 作業	ワーク ショップ	個人 作業	発表	視聴覚 教材	ゲスト 講師
1	ガイダンス・ボランティアの定義と体験の共有	NA	NA	○		○			○	
2	「国際ボランティア」とは①「国際ボランティア」の国際的な枠組み、活動の種類と形態、日本国内の枠組みについて概観する。	5	3.0%	○		○			○	
3	「課題2 ボランティアをしよう」オリエンテーション。PC ルームで、各自が実際にボランティア活動をする団体を探し、その団体にアプローチする。有用なサイトや情報源は講師が提供する。	8	4.8%	○			○		○	
4	「国際ボランティア」とは② NGO（国際協力を行う民間の活動団体）の活動の種類と形態、活動国、そこで働くスタッフのバックグラウンドなどを概観する。課題2を配布する。	1	0.6%	○		○			○	
5	課題1の共有とグループワーク。課題図書リストから各自が選んだ本ごとにグループに分かれてレポート内容を共有し、発表準備にとりかかる。	5	3.0%		○	○				
6	国際協力の論点①【貧困と児童労働】：南アジアのストリートチルドレン、また児童労働の事例をもとに、貧困について理解を深める。課題1のグループ発表を行う。	23	13.9%	○	○			○	○	
7	国際協力の論点②【識字と教育】：貧困の悪循環を断ち切るための一つの有効な方法としての「識字」や、海外に学校づくりを進める NGO/NPO 等の取り組みから、教育協力についての意義を考える。課題1のグループ発表を行う。	16	9.6%	○	○			○	○	
8	国際協力の論点③【環境】：国際環境 NGO アースウォッチの取り組みから、地球環境問題について理解を深める。課題1のグループ発表を行う。	7	4.2%	○	○			○	○	
9	国際協力の論点④【グローバル化と格差】：「グローバル化」や格差を体験するためのワークショップを行う。残りの発表	10	6.0%	○				○	○	
10	仕事としての国際ボランティア：形態別に実践例を取り上げ、国際ボランティア経験者から話を伺う。	34	20.5%	○					○	○
11	国際協力の論点⑤【村落支援】：地域社会での村落支援活動の事例から、国際ボランティアの地域性と持続性について考える。	23	13.9%	○		○	○		○	
12	国際社会の取り組み：国連の「人間開発」という概念を手掛かりに理解する。	15	9.0%	○		○			○	
13	課題2の共有とグループワーク：各自のボランティア体験を少人数で共有し、自分の活動プランとその団体紹介の発表準備をする。	8	4.8%		○			○	○	
14	課題2の発表	4	2.4%		○			○	○	
15	課題2の発表とまとめ、「なぜ国際ボランティアをするのか」をテーマに話し合い、全体で意見を共有する。	7	4.2%	○	○			○	○	

するための受け入れ組織として選択し、企画書を作成する対象として認めている。

3. 国際ボランティア履修学生の背景と関心

(1) 学生の背景

初回の授業では、学生たちは「ボランティア」の定義の講義を受けた後、3-4人の小グループに分かれて、各自のボランティア体験について話した。学生の体験において自発的活動は少なく、学校・地域での清掃活動などの公共的活動への参加体験が多かった。また東日本大震災の被災地支援により、地域の人たちとの交流活動や、途上国の学校支援活動を経験した学生も数名いた。

学生が国際ボランティアに興味関心を持った理由を聞いたところ（表1）、「自分の世界を広げた

い」（30%）、「自分の成長のため」（26%）として、自己の成長に期待する動機が最も高いことがわかった。次いで多い回答が「違う文化に接してみたい」（16%）、「いろいろな文化の人と出会いたい」（12%）とする異文化理解・国際交流に関する内容について高い関心が示された。本授業が外国語学部の学生と、教員志望の学生が多い人間学部児童教育学科の学生を対象に開講されていることが、興味関心の高さの結果に表れているといえる。いずれも自己の発見や発展を求めて履修している学生が多い。

(2) 印象に残った授業と授業形式

表2が示すように、印象に残った授業を選択してもらった。最も割合が高かったのは、第10回の授業だった。この授業は「仕事としての国際ボランティア」という題目で、国際ボランティアの経験者

表3 なぜ国際ボランティアに興味をもったのか（授業後・複数回答）

学生からの回答	人数 (外国語学部)	人数 (児童教育学科)	合計	割合 (N=129)	授業前の割合 (N=72)
1. いろいろな国、文化の人と出会いたい	21	12	33	26%	13%
2. 国際社会に貢献したい	6	5	11	9%	0%
3. 自分の成長のため	15	11	26	20%	26%
4. 自己発見のため、自分を試したい	5	1	6	5%	7%
5. 自分の世界を広げたい	16	6	22	17%	31%
6. 違う文化に接してみたい	12	5	17	13%	17%
7. 楽しそうだから	5	8	13	10%	7%
9. その他（具体的）	1	0	1	1%	0%
合計	81	48	129	100%	100%

として、南アジアで学校づくりを進めているNPO理事をゲスト講師として招聘し、話を伺うという内容であった。学生は講師との質疑応答により、国際ボランティアに関わった動機や、活動成果とともに苦労している点などを聞き、南アジアでの教育や貧困の課題を自分たちの課題として認識することができた。その時のコメントでは、「世界ではまだまだ貧困がひどい。貧しい国の実態を知ることができた。（多数あり）」「実際に働いている人から話を聞いて、日本は平和でも他国はとても大変だということを実感した。」「国際ボランティア経験者の方から実際に話を聞ける機会は貴重だった。」など、実際の現場に関わるゲスト講師を招いての授業は、大いに印象に残ることがわかった。

次いで選択者が多かったのは、第6回目の「貧困と児童労働」の授業であった。本授業では、視聴覚映像教材として「カカオの真実」「カカオ農園で搾取される子どもたち」¹を取り上げ、植民地支配を受けたガーナがカカオ生産大国になった歴史から、欧米諸国の富と植民地被支配国の貧困について理解を深めた。後半は貧困についての課題図書を選択した複数のグループから報告発表があった。児童労働についての過酷な状況について、見聞きして衝撃を受けた学生のコメントが多く見られ、児童労働を無くするために、国際条約や政府の取り組みだけでなく、NGOの果たす役割について考える契機となったと考えられる。

同様に高い割合で選ばれた授業では、第11回目の「国際協力の視点⑤村落支援」というテーマであった。地域社会での村落支援活動の事例からフェアトレードを取り上げ、理解を深めた。フェアトレード

について初めて聞いたという学生が半数以上おり、実際にフェアトレード製品を購入したことのある学生のコメントから、「なぜ製品は高価なのか」「美味しいのか」等の問いに対して、講師が実際にいくつかのフェアトレード商品を準備して、チョコレートを試食やバッグの手触りなどを体験する導入を準備した。最後の小グループでの議論では、どうしたら日本でもフェアトレード製品が普及するかについて、学生から提言があったので、以下紹介する。

- 口コミやインターネット、SNS等のメディアを活用して、フェアトレードについて知る。知識を得る。
- 通販、商品の陳列、CMやフェスなどの利用が良い。もっと有名人の力を借りて、情報を拡散するだけでなく、一般人がどれだけ活動するかにかかっている。
- フェアトレードの基準はたくさんあるとわかった。私の口にフェアトレードのチョコが運ばれるまでに、沢山の過程を通過して、生産者の方に感謝しなければならないと感じた。
- 自分が買うものを考えて買わなくてはならない。スーパーやデパートなどで、「フェアトレードという言葉が入る（わかる）ようになった」というコメントが複数あり、フェアトレードについて知らなかった学生にとっては、新たな世界が拓ける契機となった授業であったといえる。

以上のことから、90分の授業において、新たな知を得ること、考え抜くこと、それを話したり書いたり表現することが好まれ、参加型の授業が望ましいことがわかった。学生が各授業のテーマに深く関わることが重要であるといえる。

4. ボランティア活動の位置づけと学生の変容

(1) 本授業のねらいと2つの課題

本授業では、実際のボランティア活動を必修とはしておらず、授業目標として①「国際ボランティア」の枠組みや手法、NGOや政府、国際機関の取り組みを知り、開発学の理論を学ぶこと②実際にボランティア活動を体験するためのプラン作りを行うことを掲げている。「ボランティア活動に興味があるがアプローチの方法がわからない」「どんな団体があるのか知りたい」という学生に履修して欲しいとシラバスには記載した。

授業では試験を実施せず、2つの課題を課している。

課題1では、国際ボランティアの現場を知り、そこで目の当たりにすると思われる貧困や地球環境の課題についての理解を深めるために、それらに関する図書リストから学生が1冊を選択して、①本を読んで要約をまとめる。(800字程度)②共感した点を2点挙げ、それぞれの点についてその理由を書く。(1,200字程度)とした。選んだ本のタイトル、出版年、著者名、出版社を必ず記載して、選んだ本以外に、参考資料・文献があれば、レポートの最後に書くことを明示した。さらに本からの引用方法など「レポート作成例」という文書を配布して、報告・論文の書き方を学ぶ基礎となるように指導した。

また課題2では、「国際ボランティア実践プラン」を作成する。「国際ボランティア」を实践するために各自でリサーチを行い、ボランティア活動プランを作成してレポートを提出する。提出したレポートをもとにグループで話し合い、グループ発表を行う。課題の目的として、①情報収集力を高める：自分の関心を反映させるリサーチ（質的・量的両方のデータ）②自身の主体性・関心の発見：自分にできるボランティアを見つける③コミュニケーション能力：教室内で体験や情報を共有することを明示した。

授業では、表2に示されるように、授業の前半では国際協力・開発の「理論」を、後半は理論に基づく課題を設定して、毎回グループのメンバーを変えて3-4名の小グループでディスカッションを行った。授業の終末では、話しあった内容を共有する時間を取るようになった。またグループ発表の時間を設

定して、学生同士で総合的に学びあい、ボランティア活動の一步を踏み出すことを目的とした。

(2) 授業での学びと学生の変化

授業の最終回で、「なぜ国際ボランティアに興味を持ったのか」について、質問紙（無記名）により、複数回答で聞いた（表3）。設問は、第1回目の授業と同じ項目（表1）とした。

授業後に見られた学生たちの学びは多様であった。最終授業後に「授業について学んだこと」に関して尋ね、57名のうち54名から無記名により記述回答を得た。その結果から、テキストマイニングに基づく分析により学生の回答傾向を把握するため、KHCoder4 (version2.beta31)を適用して（樋口2004）共起関係になる語の抽出と言語グループによる文書出現数の統計解析を行った。共起ネットワーク（表4）と頻出言語数（図1）から、「ボランティア、自分、世界、貧困、参加、授業、知る、思う、学ぶ」の出現数が多数あり、ボランティアについて知ることや思うことが多くあったことが分かった。「他国、助けあう、活動」が共起された学びとなり、「世界、貧困」についても重要な学びであったと考えられる。

以下、いくつかのコメントの内容を紹介する

表4 学生のコメントで記載された語の出現数

抽出後	数	抽出後	数	抽出後	数	抽出後	数
名詞		サ変名詞		地名		動詞	
ボランティア	47	参加	9	日本	5	知る	34
自分	18	授業	7	ネパール	1	思う	27
世界	15	トレード	5			学ぶ	9
貧困	12	話	5			感じる	4
人々	7	支援	3	ナイ形容		見る	4
国際	6	活動	2	問題	6	考える	4
国内	6	経験	2			知れる	4
種類	6	実感	2			分かる	4
団体	6			副詞可能		聞く	3
フェア	5			たくさん	11	見える	2
興味	5	形容動詞		今	5	行う	2
海外	4	様々	6			困る	2
環境	4	色々	4			持つ	2
社会	4	気軽	2	未知語		助ける	2
機会	3	必要	2	NA	4	助け合う	2
現実	3	平和	2	NPO	4	触れる	2
現状	3			NGO	3	変わる	2
国外	3			SDGs	2	話す	2

どんなことをするなど、そのような情報が周りにとっても少ない。そして大学生全部じゃないけど、バイトなどで忙しい人はボランティアするのは困難だと思う」「無理やりやる事ではないと思う。」「お金をもらうために働いている大学生はボランティアをしようとは思わない」という内容があった。大学生は時間が無く、お金がない場合も多いと思われ、そのような状況で無償のボランティアよりも、アルバイトを選択する状況になる傾向がある。「お金に変えられない何か」ということをアピールしなければ、大学生の意識を変えるのは難しいと思われる。最後に次の辛口のコメントを紹介する。「まず破壊させてみる。(例えば森林破壊)それが嫌だったら植林活動とか参加するだろうし、口先で言っているだけでは何も始まらない。まずは、壊してどう思うか?そこが善人と悪人の分かれ目」として、真摯にボランティア活動に向きあって、考えた末のコメントとしての回答もあった。

6. 学生たちが習得する学びと教師の学び

以上の学生たちのコメントから、学生たちが習得した学びと、教師がねらいとしていたが達成できなかった学びについて考察した。

(1) 国際協力と社会貢献に関する知識

貧困問題や児童労働、環境の課題などの国際的な課題に遭遇して、国際協力と社会貢献についての理解を深めた。国際協力学の基礎的知識を学んだといえる。

(2) 目的に応じた情報・知識収集力

社会的国際的課題解決にむけて行動する NGO/NPO を調べ、目的に応じた情報や知識の収集を行い、身近にできるボランティアがあることを知ることができた。

(3) 想像を働かせて他者を思いやり、共感すること

NGO/NPO で仕事をしてきた経験者と出会い交流することで、ボランティアとしての実際の仕事の内容を理解し、実際に組織や自分の身の回りのできることを考え提案した。

しかし、貧困などの問題は途上国だけでなく、私たちの身近な問題でもあることについての気づきや、国内外の「他者への共感」から、ねらいとして

きた「共生への考察」については、達成感が弱いといえる。また学生による教師の評価についての記述から、教師が今後の授業について反省すべき点については、講義が長い、授業の時間配分、より多く学生同士のコミュニケーション、片寄りない発言者、授業をゆっくり進める、延長はしない、私語はなくする、パワポは見やすいが眠くなりやすい、(学生の)発表時間は長くとる、評価シートが多い等という意見があり、講師はこれらを真摯に受け止める必要があると考える。また担当講師によるボランティアの話をもっと聞けると良かったとする意見もあった。さらに「ボランティアを調べるだけでなく、実際にボランティアに参加した方がより理解が深まる」という意見が複数あり、今後の授業で検討していきたいと考える。

おわりに

「国際ボランティア論」の授業について、受講者のボランティア経験は多くないが、自己の発見や自分探しについて、また海外・国際について関心の高い学生であることがわかった。こうした学生にとって、ボランティアについての知識と活動への準備は、様々な気づきと考察、そして能力の習得を促す。また担当講師は、そもそも都内の小学校教員であり、国際環境 NGO でのボランティアスタッフの豊富な経験があり、さらに大学院博士課程に所属して南アジアへ研究調査に赴く機会があることから、体験を語ることは、学生にとって授業への興味関心を高める材料となるであろう。

教育現場において、ボランティア活動を単位取得目的とすることは、ボランティアの義務化や強制にならないよう慎重な議論を要する(小谷 2002)とされる。実際に 2018 年度の「国際ボランティア論」の授業では、教員の介入は関心分野の絞り込みへの指導と検索サイトの紹介までとして、ボランティア活動を推奨しているが、必修とはしていない。学生がボランティア活動を望んでいる場合は、週末や長期休業中を利用してボランティア活動を継続して支援し、実際の報告を他の学生と共有しあうことができるような機会を設定していく。また災害保険への加入方法や「ボランティア活動報告会」が共有でき

ればと考える。さらに大学内に「目白大学ボランティアセンター」を設置して、学生の自発性を促す活動を行うことが期待される。

学生からは、フェアトレードの授業のあと、「授業でフェアトレード商品を買ってみたり、不要になった服などの回収や、授業でボランティアを促進するポスター作りをしてみたり、目白大のキャンパス内に貼るといった企画があったらいいなと思った。」というコメントが聞かれた。授業の成果を授業以外で、少しでも発表できる場や機会を構築することができればと考える。

「国際ボランティア（論）」の授業は、目白大学では2006年から開講されており、国際的視点を持ち、国内でのボランティア活動へ参加することを目的とした（新村2012）。ボランティア活動を取り入れる科目を開設する大学は増加していると見られ（村上2002）、実際にボランティア活動を推奨している大学は多数ある。また東京都と東京オリンピック組織委員会では、ボランティアの担い手として学生に期待を寄せており、スポーツ庁や文部科学省を通じて、全国の大学と高等専門学校に対し、2020年の東京オリンピックのボランティアに参加しやすいように授業や試験期間を繰り上げるなどの対応を求める通知も出されている²。大学生におけるボランティア活動のあり方について、大学としての方針を検討する必要があると思われる。

「ボランティア」とは、そもそも志願兵という意味として、海外では、ボランティア活動が兵役の義務に匹敵する国や、NGOでのインターンの経験が就職に有利とされる企業が多数ある。また欧米のNGOには、大手企業と同等またはそれ以上の高収入を得られる職場として、就職先としても人気が高い組織・団体もある。

国際ボランティアとその活動は時代によって変遷しており、国際協力と社会貢献の視点から、今後も需要と必要性の高い学問領域であると考えられる。

《注》

1 「カカオの真実」<https://www.youtube.com/watch?v=IZlsymSN9XQ>より取得（2018/10/06）
「カカオ農園で搾取される子どもたち」<https://>

www.youtube.com/watch?v=BfB3ZTL3RTwより取得（2018/10/06）

2 NHKが東京都内の国公立138の大学にアンケートを実施し、86%に当たる119校から回答を得た（2018年9月）。学生のボランティア参加については「学生の自主性に任せる」が50校、「積極的に参加してほしい」は48校であった。また2018年7月の通知を受け、ボランティアに参加しやすいよう大会期間中の授業や試験日をずらすことを検討しているかという質問に全体の66%に当たる79校が「その予定がある」などと回答した。さらに五輪ボランティアへの参加を単位として認めるかとの質問には、亜細亜大学や日本体育大学など4校が「認定する予定がある」と回答。さらに55校が「検討している」と回答し、東京都内全体の国公立大学のおよそ半数の49%の大学が単位認定を検討していた。

《参考・引用文献》

- 樋口耕一（2004）「テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合—」、『理論と方法』第19号1巻,101-115. 小谷直道（2002）「自発性ということ」, 雨宮孝子・小谷直道・和田敏明編著『ボランティア・NPO』, 中央法規出版
- 熊岡路矢（2004）「市民による国際ボランティア」, 遠藤克弥編『現代国際ボランティア教育論』, 勉誠出版, 129-154.
- 牧田東一編著（2013）『国際協力のレッスン—地球市民の国際協力論入門』, 学陽書房
- 村上哲也（2002）「大学とボランティア」, 雨宮孝子・小谷直道・和田敏明他編著『ボランティア・NPO』, 中央法規出版
- 新村恵美（2012）「国際ボランティア活動の実践による、学生の気づきと変化—きっかけづくりの重要性」, 『目白大学高等教育研究』, 第18号, 71-77.
- 内海成治（2011）「ボランティア論から見た国際ボランティア」内海成治・中村安秀編『国際ボランティア論』, ナカニシヤ書店
- （受付日:2018年10月31日、受理日2018年12月7日）